

心理臨床に携わる者の父性・母性に関する研究

学校教育専攻

教育臨床コース

吉 見 摩 耶

指導教員 葛西 真記子

1. 背景と目的

昨今、日本社会において、いじめや不登校、ひきこもり、児童虐待など、子どもをめぐるさまざまな問題が取り上げられており、このような問題の背景には、社会の変化、価値観の多様化などさまざまな原因が潜んでいると考えられる。正高（2004）はその原因の一つとして、現代の母親・父親像の曖昧さを挙げ、「大事なことは母親の役割（母性）と父親の役割（父性）のバランスである」と述べている。

心理臨床分野においても、吉田・山中（1987）は、カウンセリングにおける臨床家の個性や態度のうちで最も重要な対極として父性と母性を取り上げ、両性のいずれもカウンセリングにおいて必要なものであると述べている。筆者も、この考えを支持し、さまざまな悩みや問題を抱えたクライアントと関わる臨床家には、父性・母性いずれの機能もバランスよく具わっていることが求められるのではないかと、そして、その父性や母性の在り方には臨床家が依りどころとする理論や経験が大きく影響しているのではないかと考えた。

よって、本研究では、心理臨床に携わる者の父性・母性の在り方について、カウンセリング場面における応答反応や臨床活動を行う上で依りどころとしている理論、臨床経験との関連について検討することを目的とする。

2. 対象と方法

（1）対象：対象は、国立大学法人 B 大学大学院において臨床心理学を学ぶ修士課程 1 年生 32 名（男性 10、女性 22）と、A 県臨床心理士 32 名（男性 13、女性 19）。

（2）方法：質問紙調査。父性度・母性度を測定する尺度は、花沢（2000）の「父性度・母性度評定尺度」を使用した。父性度・母性度を測る項目がそれぞれ 9 項目、全 18 項目の回答を 4 件法で求めた。応答を測定する尺度は、Tracey ら（1988）が作成した「セラピスト応答尺度 (Therapist Response Questionnaire ; TRQ)」から 5 つの課題を選び、自由記述で回答を求めた。カウンセラーの応答反応については「支配－服従」、「広範囲－特定性」、「認知への焦点－情緒への焦点」、「要求への対応性」、「直面化」、「明確化」、「解釈」、「共感」という特徴をどの程度示すのか、5 段階で得点化した。

3. 結果

（1）父性度・母性度尺度

父性度・母性度それぞれについて所属を要因とした t 検定を行った結果、父性度・母性度のどちらにおいても臨床心理士と大学院生の平均値に有意な差はなかった。次に、それぞれの同一被検者内における父性度・母性度得点の平均値における t 検定を行った。その結果、両者において父性度よりも母性度の方が高いということが明らかになった（ $t = 8.64, p < .001$; $t = 6.41, p$

< .001)。さらに、性別を要因とした t 検定を行った結果、父性度尺度得点において男性の方が女性よりも平均値が有意に高い傾向がみられた ($t = 1.79, p < .10$)。

理論 (精神分析と精神分析以外)・経験 (5 年以上と 5 年以下) を要因とした 2 要因分散分析を行った結果、父性度において交互作用は有意傾向であった ($F(1,32) = 3.81, p < .10$)。母性度において交互作用は有意であった ($F(1,32) = 10.10, p < .01$)。理論、経験の主効果は有意でなかった。Bonferroni 法を用いた単純主効果の検定の結果、5 年以上の群において精神分析以外の理論に依って立つ者の母性度得点よりも、精神分析に依って立つ者の母性度の方が有意に高かった ($F(1,28) = 4.32, p < .05$)。

(2) セラピスト応答尺度

TRQ の 8 項目それぞれの得点において所属を要因とした t 検定を行った結果、支配得点 ($t = -2.67, p < .05$)、認知得点 ($t = -2.40, p < .05$)、要求対応得点 ($t = 3.78, p < .001$) の平均値において、臨床心理士よりも大学院生の方が有意に高かった。特定性、直面化、明確化、解釈、共感性得点の平均値においては臨床心理士と大学院生との間に有意な差はなかった。

TRQ の 8 項目それぞれの得点において理論・経験を要因とした 2 要因分散分析を行った結果、「認知得点」のみ交互作用は有意であった ($F(1,32) = 4.71, p < .05$)。理論・経験の主効果は有意でなかった。Bonferroni 法を用いた単純主効果の検定の結果、5 年以下の群において精神分析理論に依って立つ者よりも、精神分析以外の理論に依って立つ者の認知得点の方が高い傾向が見られた ($F(1,28) = 3.07, p < .10$)。

次に、母性低・高群を要因とした 2 要因分散分析を行った結果、8 項目全てにおいて交互作用は有意でなかった。「特定性得点」の母性度の主効果は有意傾向があった。

4. 考察

父性度・母性度については、臨床経験の違いによる差は見られず、心理臨床に携わる者は基本的に「母性的」であるということが明らかとなった。これはカウンセラーの基本的態度とも関連しているように思われるが、言い換えれば、父性獲得に対する意識の必要性も示唆されたように思われる。

臨床家の父性度・母性度と理論・経験との関連については、「父性度」・「母性度」ともに精神分析理論を依りどころとする者において高かった。これは、精神分析理論における父性的な機能をうまく取り込み、カウンセリングの中で上手く用いることのできる父性的な性格特性を備えていることや、父性的な機能を上手く用いるために、父性よりもさらに深い母性が根底に存在しているのではないかということが推測された。

心理臨床に携わる者の父性度・母性度と応答との関連については、ほとんど関連性を見ることができなかった。これは、カウンセラーの応答反応、すなわちカウンセリングで用いられる父性および母性機能には、父性・母性というカウンセラー個人の性格特性以上に、カウンセラーの技術的な側面が影響しているのではないかということが考えられた。

従って、クライアントにとってより良いカウンセリングを行うためにも、父性・母性機能を効果的に用いる技術の獲得と、そのための訓練が重要であるということが言えるだろう。